

横 塚 山 古 墳

— 墳丘裾部の調査 —

埼玉県熊谷市遺跡調査会

序

熊谷市は、直接的に荒川の水の恵みを受け、一方間接的に利根川の影響も受けて、発展してまいりました。私たち熊谷市民の先祖が古くから居住してきたことを裏付けるものとして、古墳・住居跡・祭祀遺跡等の古代遺跡が数多くあり、市内各地に散在しています。これらの遺跡は郷土の先輩が私たちに残してくれた文化遺産であります。このような貴重な文化財を後世に永く伝えることは、私たちに課せられた大きな責務であります。

さて、熊谷市は県北の中心に位置し、社会の進展にともない、各方面への道路の整備が求められています。この一環として、昭和44年、県道熊谷・太田線（妻沼街道）の交通緩和をはかるために、新たな県道、すなわちバイパスの建設が計画されました。この路線上に熊谷市指定史跡横塚山古墳があり、現状のまま保存することについて、各方面と協議を持ちましたが、公共性という視点からみると路線変更はいかにしても困難という結論に達しました。その後、墳丘部をできるだけ（原形で）保存したいという地元住民と文化財保護関係者の強い要望と、県道路建設関係機関の文化財に対する理解とが相まって、歩道は墳丘を迂回して建設されることになり、今回の記録保存のための発掘調査が実施されました。

この発掘事業は、埼玉県の委託を受けて、熊谷市遺跡調査会が主体となり、早川智明先生・菅谷浩之先生に指導をお願いして、発掘調査を実施しました。

この報告書は、埋蔵文化財の記録保存ということで、調査の概要がまとめられたものですが、これにとどまらず、多くの人に活用されることによって、文化財の保護について、一層の理解を得ることができれば、幸いです。

末筆ですが、この期間中御協力くださった調査員各位、地元関係者、熊谷土木事務所、県文化財保護課の方々に深く感謝いたします。

昭和 52 年 2 月

熊谷市教育委員会

教育長 森 田 芳 一

熊谷市遺跡調査会

会 長 夏 目 米 蔵

例 言

1. 本書は、熊谷市大字中奈良字横塚511、512に所在する、熊谷市指定史跡「横塚山古墳」の墳丘裾部の調査報告である。
2. 調査は、熊谷～太田間のバイパス工事に伴うもので、昭和51年12月19日から12月29日の間の8日間で実施した。
3. 調査は、埼玉県熊谷土木事務所の委託を受けて熊谷市教育委員会が中心となり、熊谷市遺跡調査会（夏目米蔵会長）で実施した。
4. 今回は第二次調査であり、第一次調査は昭和46年2月～3月にかけて埼玉県遺跡調査会で実施し、報告書も刊行されているので参照されたい。
5. 本書の「Ⅲ 調査日誌より」の執筆は事務局の日誌を菅谷がまとめた、他は菅谷が記したものである。
6. 発掘参加者
担当者 早川 智明
参加者 菅谷 浩之
（熊谷市文化財保護審議委員）
平井 隆（市立図書館主事）
事務局 山下 光男
（教育委員会社会教育課長）
大久保照雄
（ 〃 社会教育課長補佐）
宮本 和男
（ 〃 社会教育課主事）

目 次

序	
I はじめに	1
II 横塚山古墳の立地と環境	1
III 調査日誌より	3
IV トレンチ	5
V 墳輪について	6
VI まとめ	10

I は じ め に

横塚山古墳は、熊谷市大字中奈良字横塚に存在している。熊谷市は県北の中心に位置し、近郊の市町村から熊谷市に向かって道路が延びている。ところが最近の交通量の増加により、いずれの道路も渋滞が目につくようになり、道路の整備が急がれる状態になっている。

横塚山古墳の存在する奈良地区は、県道太田・熊谷線が通るが、群馬と熊谷を結ぶ重要な道路で、交通量も多く道幅が狭いため朝夕はよく渋滞し、危険でもあるためバイパスの建設が急がれた。そのため県道路建設課では、県道の西方にバイパスを計画した。

路線の決定にともない、当時の県教育局社会教育課では路線上の埋蔵文化財について調査したが、路線では前方後円墳の横塚山古墳の一部が問題となった。横塚山古墳は昭和44年に市指定史跡になっていて、市内の前方後円墳は、肥塚古墳群、三尻古墳群内に各一基が残るのみで、貴重なものである。県では道路建設課と協議し「工事に関しては現存する墳丘の変形をできるだけ少なくし、歩道を高架にするなど、景観上の損壊をきわめて少なくし」道路を建設することにした。

工事を着工するにあたり、昭和46年2月から3月にかけて埼玉県遺跡調査会によって、後円部周溝の調査が行なわれ、報告書が刊行されている。(注1)その時点では墳丘の削平等の問題はなく、4車線のうち東側の2車線が開通した。その後西側の車線の工事が進むに伴い、墳丘全測図でも理解できるように後円部の一部が、削られることになった。昭和50年に県文化財保護課では、工事の際の削平に文化財関係者の立合いのもとでの工事を許可した。

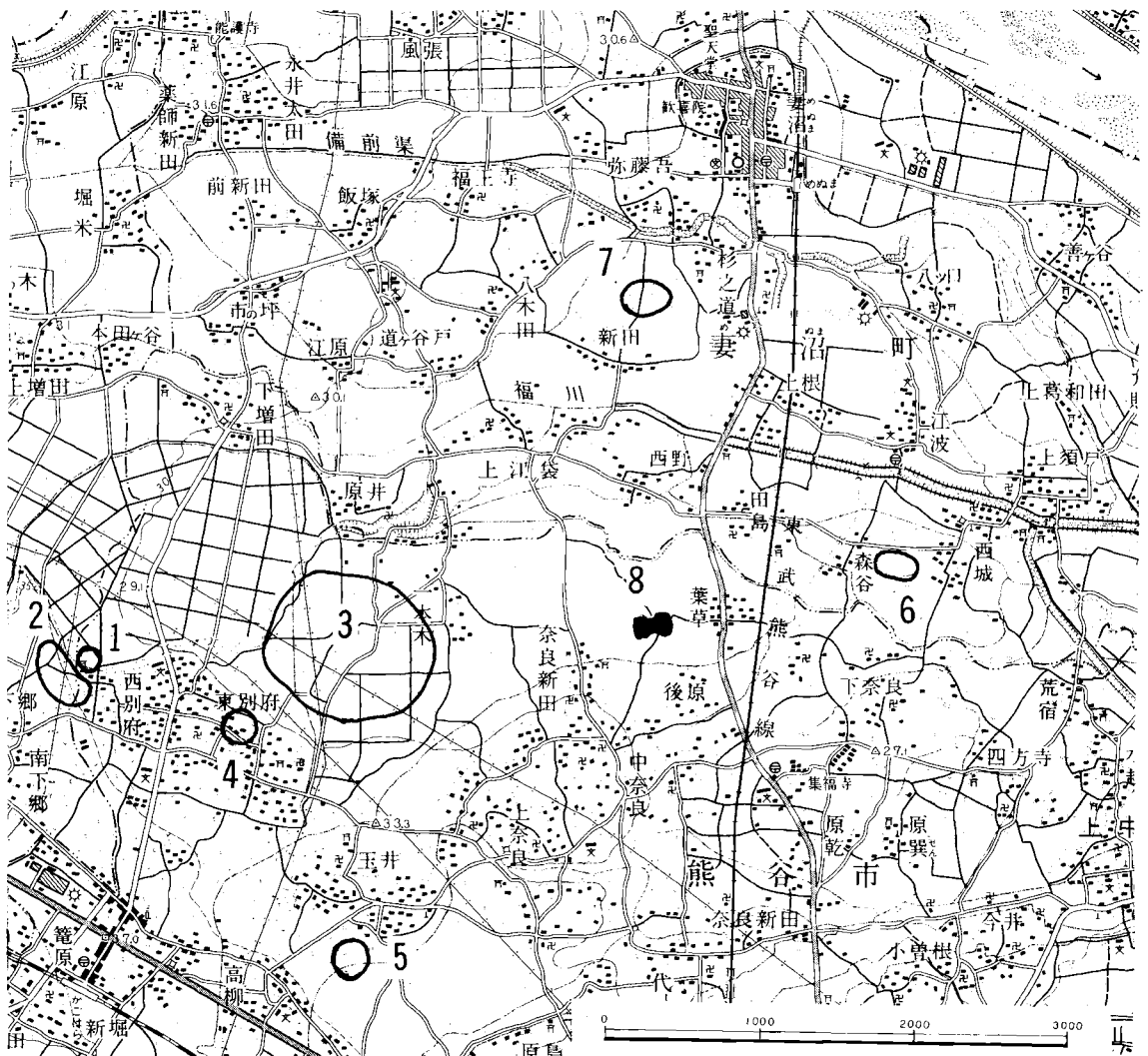
車線はすべて完成したが、歩道の問題がでてきた。古墳をまたぐ高架の歩道では、道路建設課としても問題があり、高架の場合は古墳の景観をいちじるしくそこねることにもなる。熊谷市指定史跡でもあるため、熊谷市文化財保護審議会では、度重なる審議の結果、古墳を迂回して歩道を通すよう、工事の直接施行者である県熊谷土木事務所に要望した。

最終的に歩道は古墳の裾部を迂回することになり、歩道建設で周溝の破壊が行なわれる恐れがあるために、歩道部分の確認調査を実施することになった。調査は熊谷市教育委員会を中心に、昭和51年12月熊谷市遺跡調査会で、実施した。

調査にあたり機材等の置場を提供された泉万吉氏、横塚山古墳所有者石坂謹之助・石坂慎治氏には、かくべつのご協力を得ましたことを感謝いたします。

II 横塚山古墳の立地と環境

横塚山古墳の所在する奈良地区は、熊谷市の北西に位置して、利根川と荒川のはざら中間に位置している。近年までこの地域は農村地帯として、水田を中心に農業を行ってきたが熊谷寄りの地域では、新興住宅地として、また今回の調査に関連したバイパスの完成によって、この付近も大部変容し、バイパス道路沿いには工場をはじめとして、ドライブインなどが立並びはじめている。



第1図 横塚山古墳と周辺の遺跡

1. 湯殿神社祭祀遺跡 2. 西別府遺跡 3. 別府桑里遺跡 4. 別府古墳群 5. 玉井古墳群
6. 鶴森・入胎遺跡 7. 弥藤吾新田遺跡 8. 横塚山古墳

今でも道路の両側には水田が残っているが、バイパスが完成する以前の横塚山古墳の付近は、一面の水田地帯で、古墳のみが存在していて、墳丘には樹木がおおい茂り横塚山古墳は別名「オトウカヤマ」と呼ばれ、夜間に近くを通るのがこわいほどであったという。

水田地帯でもわかるように、この付近は古く利根川や荒川等の氾濫を受けていて、台地は見られず、微高地程度で土は粘土質である。

横塚山古墳周辺の遺跡としては、とくに見るべきものはない。これはこの付近に台地が見られない

こと、それに遺跡が存在しても氾濫で埋没して発見できないものがあると思われる。横塚山古墳の近くにも、円墳等が存在していた可能性は強い。

この付近の水田は、奈良地区の西に所在する別府地区から続くが、別府は農業構造改善事業が行なわれるまで条里遺跡が良好な状態で残っていた。(注2)条里水田の水源は西別府の湯殿神社付近に求められ、湯殿神社の裏で祭祀遺跡が発見されて、滑石製の櫛や有孔円板の模造品をはじめ、土器等の出土を見ている。(注3)また、神社の南には奈良、平安時代の集落跡や、古瓦なども発見されている。

古墳も近くには存在せず、別府古墳群、玉井古墳群、肥塚古墳群等が奈良地区の周辺に存在するが、いずれも3kmから4kmほど離れている。奈良地区はむしろ大里郡妻沼町に接していて、利根川の支流である福川の自然堤防上には集落跡が見られ、妻沼町西城では昭和48、49、50年の3回にわたり県遺跡調査により、古墳時代や奈良時代の集落跡の鶴森、入胎遺跡の調査が行なわれている。

バイパス工事においても、昭和50年に古墳時代の集落跡である、弥藤吾新田遺跡の調査が行なわれている。(注4)

注1 増田逸朗他「横塚山古墳」埼玉県遺跡調査会報告第9集 昭和46年

注2 小沢国平他「熊谷市東別府条里遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第12集 昭和46年

注3 大場磐雄、小沢国平「新発見の祭祀遺跡」史迹と美術 第338号 昭和38年

注4 栗原文蔵、小林重義「妻沼町弥藤吾新田遺跡」埼玉考古8号 昭和45年他

Ⅲ 調査日誌より

12月19日 晴

調査前の打合せ通り、教育委員会事務局関係者をはじめ、調査関係者が8時に集合する。8時30分より夏目調査会長、山下社会教育課長等の挨拶の後に調査を開始した。

まず、墳丘の北側の後円部の場所に幅1.5mで第1トレンチを設定、トレンチは第4トレンチまで設定したが、第1トレンチで周溝は確認できず、第3トレンチでやや変化が見られた程度であった。また同時に、墳丘の写真撮影を行なう。

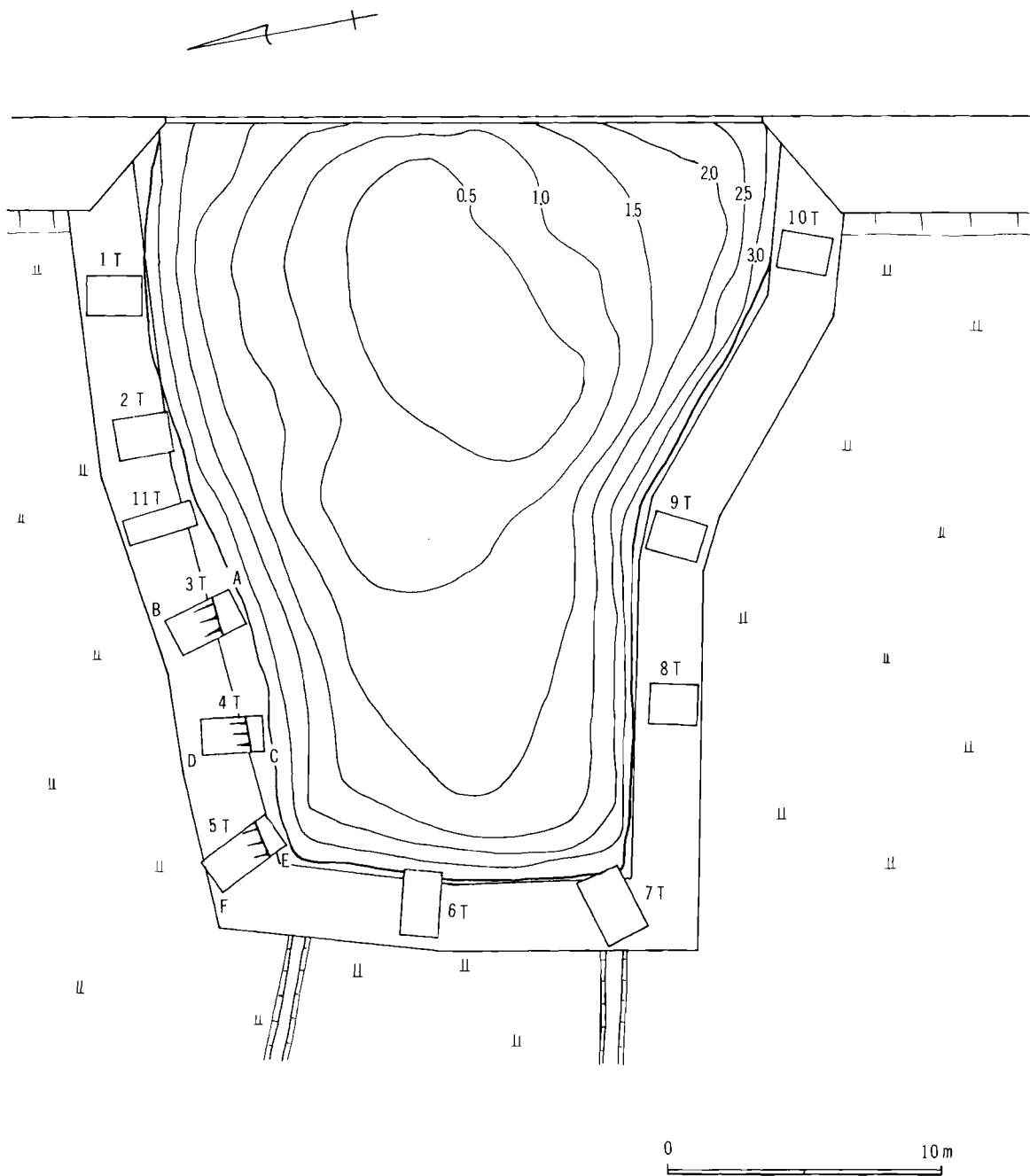
12月20日 晴

午前中に第1トレンチの断面図を作成する。第5、6、7トレンチを設定、第5トレンチからは埴輪片が多数出土した。第2、6、7トレンチからは周溝は認められなかったため、これらのトレンチの調査を打ち切った。この付近は周溝の内側に位置していると思われる。

12月21日 晴

午前中に、測量の関係もあり墳丘の伐採作業を行なう。午後墳丘の南に8、9トレンチを設定したが、土層には何の変化も見られず埴輪片も発見できなかった。

12月22日 曇のち晴



第2図 横塚山古墳全測図

第10、11トレンチを設定する。第11トレンチは第2トレンチでは上層に何の変化も見られず、第3トレンチで溝状の落込があったため、中間に入れたが、今日の段階では何の変化もなかった。第5トレンチからはあいかわらず、埴輪片が出土する。墳丘の北側トレンチの断面図を作成しようとするが、1日中トレンチの壁が凍結して上層を判別するのに困難をきたす。

12月23日 晴

今日は各トレンチの断面図を作成し、一部のトレンチの撮影を行なう。第11トレンチでは98cmまで掘り下げたが、周溝等の遺構は認められなかった。

12月24日 曇時々晴

調査は今日で終了の予定である。残った第5、10、11トレンチの断面図、写真撮影を行ない、トレンチを入れるため排土した上で、墳丘にかゝった部分の上を取り除く。

12月27日 晴

24日に残った第11トレンチの断面図を作成し、一部埴輪片の水洗を行なう。更に機材を整理し、墳丘測量を残すのみになる。

12月29日 晴

100分の1で墳丘の平面測量を行ない、墳丘裾部の調査を終了する。

Ⅳ ト レ ン チ

今回の調査は、墳丘を迂回する歩道の範囲のみという制約があった。歩道と墳丘との間の幅が、もっともある場所は「くびれ部」付近で3m程離れている。第一次調査では、後円部東側を中心にトレンチを設定していて、墳丘の裾部から5m程度離れた所で周溝の落込が確認されているため、今回の調査トレンチにおいての周溝の発見は、当初から困難とされていた。

トレンチは、後円部北側から前方部、さらに墳丘の南側にかけて、幅1.5m、長さ2mを基本に10本のトレンチを設定、第2と第3トレンチの間にも第11トレンチを設定した。

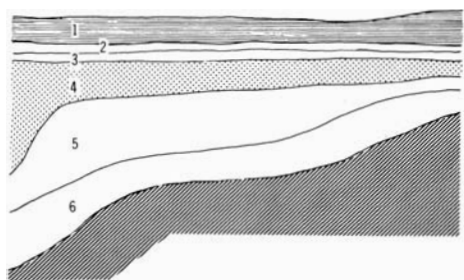
第3、4、5トレンチ以外からは上層に、何の変化も見られなかった。遺構の確認されなかったトレンチの第1層は15cmから20cm程の耕作土。第2層は5cm程の厚さで、砂を多く含み、天明の火山灰が多く含まれていた。第3層は5cmから10cmの灰褐色粘質土層。その下が鉄分を多く含む、茶褐色粘質土層で50cmの厚さがあった。

以上が、何の遺構も発見されなかったトレンチの概要であるが、第3、4、5トレンチは埴輪も出土し、土層も異っている。

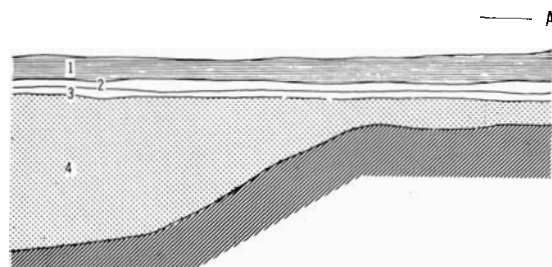
第3トレンチ

墳丘北側のくびれ部近くに入れたトレンチで、第1層から第3層までは上記のトレンチと同様な堆積状態であった。墳丘裾部より1.2m程度北側で、なだらかに落込んでいる。

水田面より、調査した範囲で最も低い部分は90cmの深さがあり、やや黒味をおびた暗褐色粘質土層が堆積し、この中に埴輪片を含んでいた。

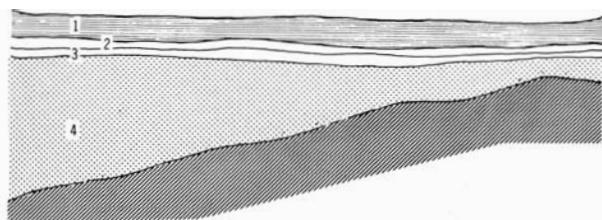


第4トレンチ



第3トレンチ

- 1 耕作土
- 2 黄褐色粘質土層（火山灰を含む）
- 3 灰褐色粘質土層
- 4 暗褐色粘質土層
- 5 黄褐色粘質土層（鉄分を含む）
- 6 黄褐色粘質土層



第5トレンチ



第3図 第3、4、5トレンチ断面図

第4トレンチ

残存していた前方部北側の中央に入れたトレンチであるが、墳丘裾部から約1m離れて落込が見られた。第4層は暗褐色粘質土層、第5層は鉄分の多く含まれた黄褐色粘質土層で、第6層は5層と類似しているが、鉄分の少ない黄褐色粘質土層で、第5層からは多くの埴輪片が出土し、第4、5層からの出土は少なかった。

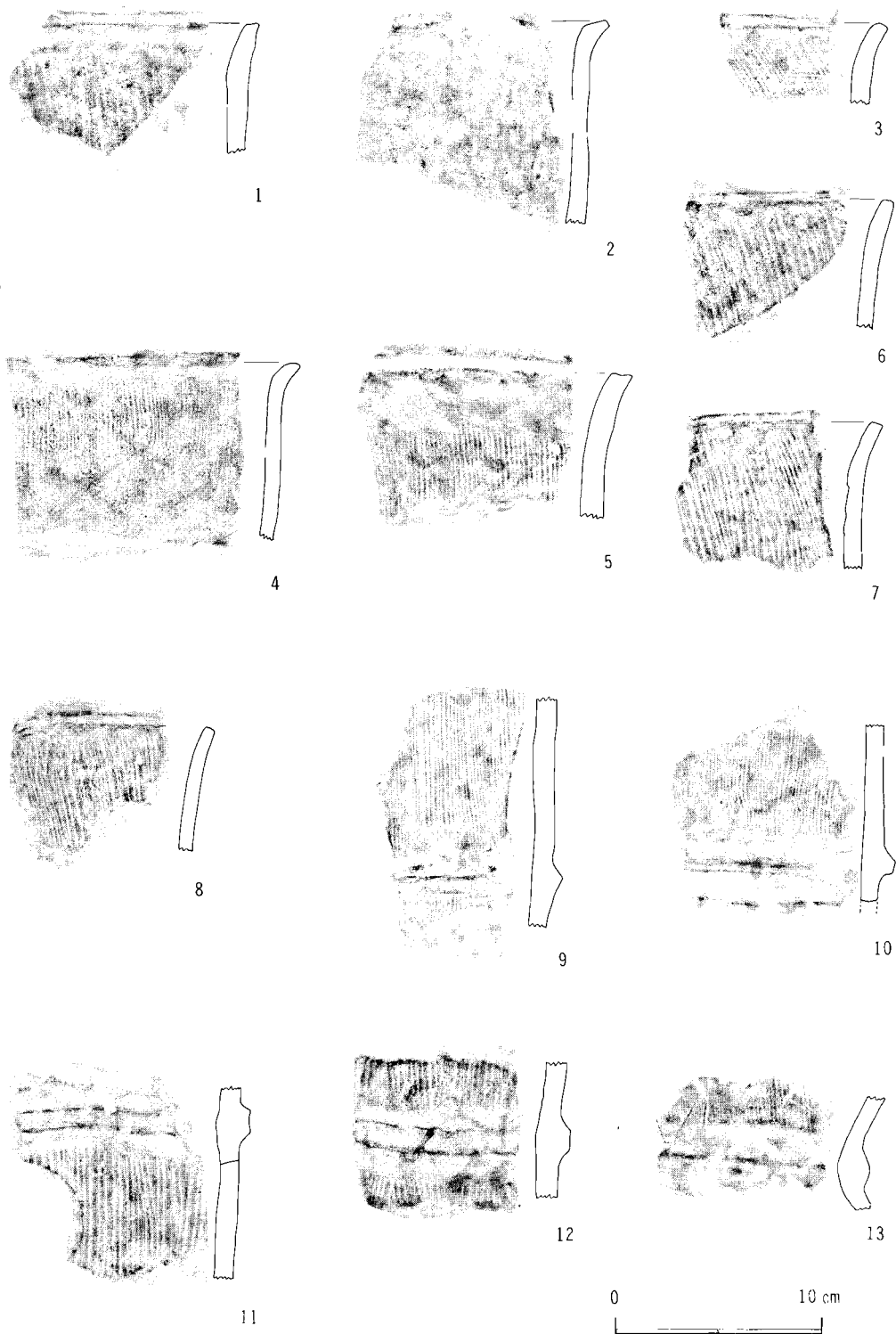
第5トレンチ

前方部北西のコーナー部に、幅1.5m、長さ3mで入れたトレンチである。トレンチの西側の断面で見ると、コーナー部の裾より北に1.1m離れた所で、なだらかに落込んでいた。

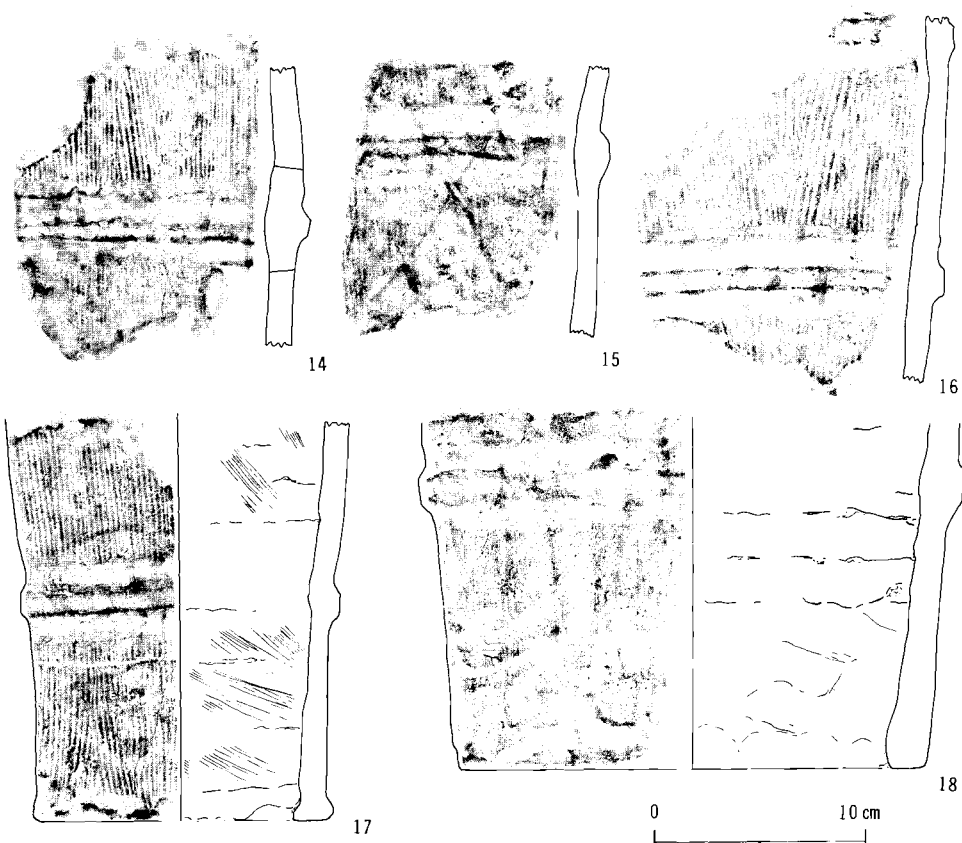
トレンチの底の方からは、多くの埴輪片が出土している。

V 埴輪について

第一次の調査の際にも多数の埴輪の出土を見ているが、ほとんど破片であった。今回の調査におい



第4図 トレンチ内出土埴輪拓影図



第5図 トレンチ内出土埴輪拓影図

でも、良好なものは少なく円筒埴輪がほとんどで、数片朝顔型埴輪が見られた程度である。

埴輪の検出されたトレンチは、第3、4、5トレンチのみで、いずれも落込み内のみである。とくに、前方部西側や古墳の南側のトレンチからの出土はなかった。主な破片について、説明しておく。

1から8は円筒埴輪の口縁部であるが、うち1から5は淡褐色をしていて、白っぽい焼きあがりである。6、7、8は赤褐色をしている。

- 1 厚さ1 cmで、内、外面とも口縁部上端が幅1 cmから1.5 cm程の幅で、横に撫でられその下は内、外面とも荒いクシ目痕が残り、焼成はや、弱い。
- 2 胴部から口縁に達しても、あまり外反しないのが特徴で、口唇部で外反している。焼成があまり良くないため、外面のクシ目はよく残っていない。内面のクシ目は上端から7 cm付近まで残っていて、その下は指で撫でてありクシ目は見られない。残存中央部で厚さが、0.9 cmと薄い。
- 3 口縁部の厚さが、0.9 cmと薄く焼成も良好でクシ目もよく残っている。
- 4 2と類似していて、胴部から口唇部にほぼ垂直に立つ。焼成がや、悪いため、クシ目の状態はあまり良好とはいえず、とくに内面では、上部に数本確認できるとどまる。厚さは0.6 cmから0.9 cmと、円筒埴輪のうちではとくに薄いものである。

胎土はよく精製されていて、わずかに微砂を含む程度で、1から4の胎土は同一の土を使用していると思われる。

- 5 淡褐色のグループに属するが、やや赤味をおびるもので、焼成、胎土とも良好で内、外面にクシ目がよく残っていて、厚さは1.2cm程である。
- 6・7 同一の埴輪であるが、厚さ0.7cmと薄く、同一埴輪でも6の部分のクシ目はやや荒い。焼成はやや弱い、内、外面ともにクシ目がよく残り、内側には輪積痕がよく残っている。8は赤褐色といえども、やや暗く厚さ0.8cmと薄いものである。
- 9、10、11、12、14、15は円筒埴輪の胴部の破片である。うち、9、10は淡褐色をしていて、他は赤褐色をしている。
- 9 凸帯が三角状で、付根の部分で幅1.3cm、高さ0.8cmほどの小さな凸帯で外面には、クシ目がよく残る。内面の整形は指で縦に撫られクシ目は全く見られない。
- 上部 には窓の一部が見られ、胴部の厚さは0.9から1.0cmと薄い。焼成は硬く良く焼けていて、胎土もよく精製され埴輪の胎土としては良好なものである。
- 10 焼成、胎土とも9と同じで、凸帯も小さく、外面のクシ目はよく残り、内面においても、クシ目はよく残ってはいないが、クシ状工具によって整形されている。厚さは0.7cmから0.8cmと薄いものである。
- 11 円窓が見られ、凸帯の上部は幅1.2cmと幅が広い。外面のクシ目はよく残り、内面にも横にクシ目が全体に見られ、輪積痕がよく残っている。焼成は普通であるが、胎土に砂が目立つ。
- 12 胎土、焼成が11によく似ており凸帯はよく作られている。胴部の厚さは1cm程度で薄い。
- 13、14は朝顔型埴輪の一部と思われる。
- 13 胴部と口縁部のくびれ部に相当するものと思われ、凸帯は三角形状をし、内、外面ともにクシ目が見られる。色調は赤褐色を呈し胎土はわずかに砂を含む程度である。
- 14 凸帯部を中心に内わんしている。色調は淡褐色をしていて、胎土、焼成とも良好である。外面にはクシ目がよく残るが、内面は指による整形痕が残り、一部に輪積痕も見られた。窓は9cm離れて、2ヶ所に見られる。凸帯の上面の幅は0.7cmで、小さな凸帯で、胴部の厚さは1.2cm程である。
- 15 胎土に小石が混っていて、焼成も良好ではない。内、外面ともにクシ目痕を残し、輪積痕も残っている。
- 16 胎土、焼成は15と類似しており、表面には小石や砂が多く見られ、ざらざらしている。外面のクシ目はよく残り、2本の凸帯が見られ凸帯間の幅は9.5cmとやや狭い。
- 内面には輪積痕がよく残り、斜にクシ目が全体に施されている。凸帯はしっかりしたものである。
- 17 底径14cm、残高19cmの円筒埴輪で、色調は赤褐色をしていて、胎土は粗く砂が多く含まれ小石がいくつも見られた。胴部の厚さは凸帯の上で0.9cm程度と、薄いものである。外面、内面にはクシ目が見られ、内面には輪積痕がよく残る。
- 18 底径22cm程度の大型の円筒埴輪で、残高は17cmであった。底部から凸帯まで12cm程あり、色調は暗褐色をしていて焼成は良好であるが、胎土は小石と砂が多い。凸帯は付着部で幅2.5cmと広い凸帯であるが、きちんと整形されていない。
- 外面はクシ目を施した後に、ヘラでクシ目を縦に撫でているため、クシ目は消されかき消されていてはっきりしない。内面にはクシ目は見られず、輪積痕が残り雑然とした感じがする。

Ⅵ ま と め

横塚山古墳の調査は、第一次調査とあわせて2回の調査を行なった。いずれも、周溝部にわたる調査であったため、横塚山古墳について詳細に検討することは困難であった。

今回の調査は12月下旬という、発掘には悪い条件であった。墳丘の北側は一日中日当りが悪く、トレンチは一日中凍結して土層の分類さえ困難で、トレンチ内で焚き火をして凍った壁面を解かして断面図を作成したほどである。また調査範囲の限定もあり十分とはいかなかったが、第二次調査によって知り得たいいくつかの点について記しておく。

横塚山古墳の存在する付近は標高29m程で、周囲を水田に囲まれた、平坦地に位置している。現在では付近に古墳は見られず、横塚山古墳1基のみしか存在していないけれども、近付の畑から埴輪片の出土もあったと言われ、かつては古墳群としていくつかの円墳も存在したと考えられる。その後、氾濫により埋没したり、破壊をされたりして消滅してしまったであろう。大型の主墳的古墳であり、横塚山古墳のみが残ったと見てよい。

古墳は平面図にあるように前方後円墳で、墳丘は本来長さ30m、後円部の最大径22.5m、くびれ部で幅15m、前方部先端で12mであった。後円部の高さは3.2m、前方部の高さ2.5mで、後円部から前方部にかけてはなだらかに落ちている。残存の墳丘は前方後円墳といっても、くびれ部の南側はやや良好であるが、北側は後円部から前方部にかけて、等高線が直線的に入っていた。後円部東側も、一部を削平する以前には、丸くならず南北に直線の裾部を形成して、あたかも前方後円墳のような墳丘であった。

このことは、墳丘の周辺が耕作等によって除々に削られた結果である。第一次調査で後円部の直径が30mと大きく、残存する墳丘の裾から周溝まで4mから7m程度離れていることから、古墳構築時から相当削られてしまっていることが理解できる。

第二次調査の目的は、周溝の確認調査であったが、調査範囲は歩道敷地内のみに限られていたため、第一次調査の結果からトレンチを設定しても何の変化も見られないと思われていた。結果は、後円部の南と北、前方部の南と西には何の遺構も検出されていない。

前方部北側の第3、4、5トレンチで、周溝の落込を確認し、内部から多数の埴輪片が出土している。調査期間と費用の関係で、一部を確認するにとどまったが、第11トレンチに落込がないということは第3と第11トレンチの間で、溝が後円部にかけて外反していると推察される。

墳丘の南側で検出されなかったことは、前方部の南側墳丘が、北側より多く削平されているためであろうか。第一次調査の後円部でも、北側より南側の方が墳丘裾より周溝までの距離があった。

前方部西側の第6トレンチで、周溝が発見されなかったことは、前方部がもっと西に延びる古墳であることを意味している。また、横塚山古墳の前方部はくびれ部から前方部先端にかけて扇状に広がるタイプではなく、前方部のひろがりの少ないタイプで、このまゝ延びる古墳であるならば柄鏡状に近い前方後円墳であるが、速断はできない。

出土遺物は、いずれも調査トレンチ内からのもので、南側のトレンチの耕作土中から灰釉片が出土

したほかは、いずれも埴輪片であった。埴輪については第一次調査報告書で、詳細に記されているため概要を記しておく。

色調で、まず淡褐色と赤褐色に大別される。淡褐色の特徴として、胎土はわずかに微砂を含む程度で、精製された粘土であるが、粘土を採取した段階ですでに小石等を含んでいない土であったろう。赤褐色の胎土は小石や砂を多く含み、粗い胎土である。

製作技法においても両者はまったく異なり、とくに内面整形において、淡褐色のものは輪積痕がほとんど見られず、クシ目も上部に見られる程度で、ほとんどの部分が指で撫でられ、凹凸のない面である。これに対し赤褐色のものは、内面は粗雑で輪積痕がほぼ全面に見られるものが多く、クシ目も全体に見られる。凸帯も淡褐色のものは小型で、埴輪の胴部も淡褐色のものは円筒埴輪としては薄いもので、焼成も硬く焼きあげたものが多い。これから両者の製作技法は全く異なるもので、工人をはじめとして、埴輪窯跡も異なるものである。

円筒埴輪のなかでも底径22cmの大型のものは、クシ目の表面をヘラで撫でて、クシ目を消している技法は、これ以外に出土していない特徴あるものであった。

以上、横塚山古墳の概要について述べたが、構築当時の墳丘は、第一次調査の結果からとも考えあわせると、主軸の全長は周溝の内側でおよそ40mであった大きな古墳であったと見られるが、前方部西側において周溝を確認しないかぎり明確にはできない。

古墳構築の年代については、石室等が不明であり、年代を決める土器などの出土はないが、埴輪等から見るかぎり、遅くとも6世紀後半には成立した古墳であろう。

ともかく、バイパス工事によって危機に直面した横塚山古墳も関係機関の努力によって歩道を古墳の裾に迂回させるという方法で、破壊せずにすんだということは、文化財の保護という点からも注目にあたいする。

今後は、この古墳を通して歴史教育に、文化財活動にいかに関与させるかが問題である。

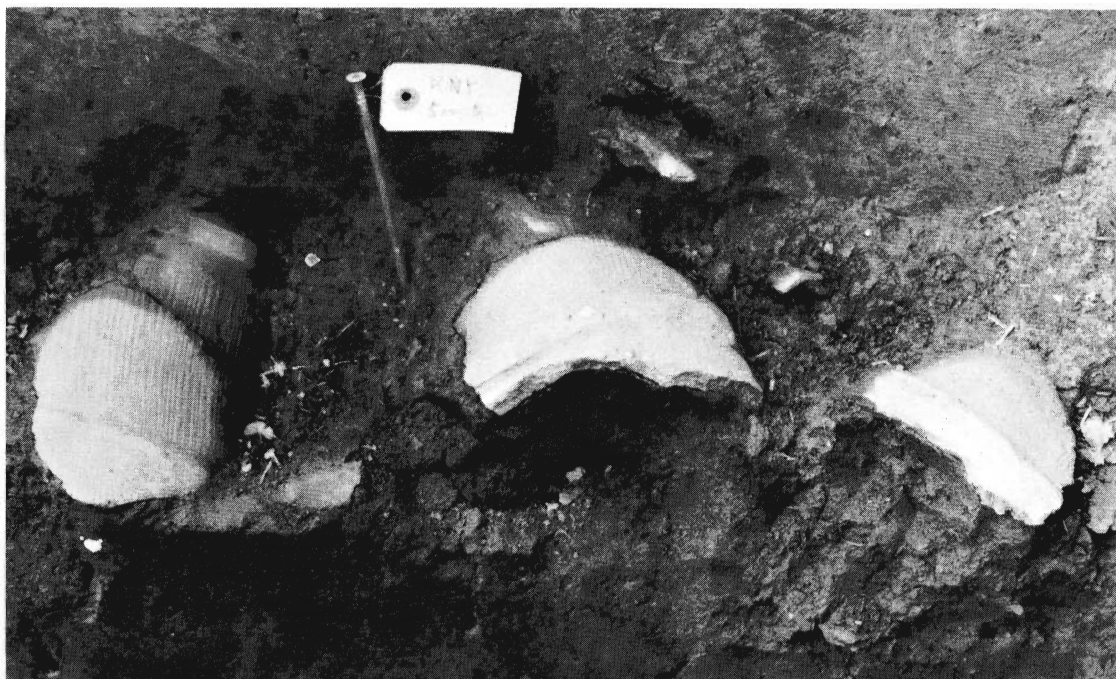
(菅谷 浩之)



図版1 横塚山古墳全景



図版2 トレンチ発掘風景



図版3 第5トレンチ内埴輪出土状態



図版4 第6トレンチ断面図

横 塚 山 古 墳

—墳丘裾部の調査—

昭和 52 年 2 月 25 日 印 刷

昭和 52 年 2 月 28 日 発 行

発行者 埼玉県熊谷市遺跡調査会
